

## 飛鳥・白鳳在銘金銅仏の調査

飛鳥資料館

51年度秋期特別展示「飛鳥・白鳳の在銘金銅仏」にともなう調査のうち、法隆寺藏の戊子の年記をもつ釈迦如来及脇侍像に関する一知見と各銘文の鐫刻技法上気づいた点をのべる。

**戊子銘像の調査** 像は光背裏に戊子年の銘があり、推古36年(628)と推定され、大きな蓮弁形拳身光を負う一光三尊式の銅造釈迦三尊像(総高49.7cm)で、いま右脇侍を失い、近世の木造漆箔の台座にのっている。法隆寺金堂釈迦三尊とよく似た様式をもち、止利派の一基準作となっている(第1図)。しかし、次にのべる諸点によって、この脇侍と戊子銘光背が本来一具としてよいかに疑いがもたれてきている。光背は下辺から4.4cmの高さに中尊用の納穴があり、下辺左右にはほぼ同高の位置に両脇侍用の縦長長方形の納穴が各々2個並んで穿たれている。左右の内側の穴の高さはほぼ同じであり、向って左に並ぶ2個の穴もまた同じ高さであるが、右の現在脇侍のある方は外側の穴が低い。また左右の内側と外側の穴は大きさと形をやや異にする。中尊の納穴の周囲にはタガネでたたいた痕があるが、同様の痕が左右の内側の納穴にも認められ、外側の穴はどちらも切口が雑である。このことから中尊と左右内側の納穴は同時期のもの、すなわち当初の納穴と考えられる。一方脇侍像には背面腰部と後頭部に丸穴付の縦位置の納がある。背面の納は現在光背の外側の穴に差込まれており、この納は内側の旧穴には入らない。後頭の納は法隆寺金堂釈迦三尊と同じく、脇侍のみの頭光がかつてあったと考えられる。また、現存脇侍の右下端の天衣先端部が上下2.2cm、左右0.4cmにタガネによって垂直に切断されていることが注目されるが、この部分は現在の中尊の台座に接している。

以上にのべた脇侍の  
天衣が削られている点  
および脇侍用の納穴が  
平行に2個ずつあり、  
かつ内側の穴には入ら  
ない点よりみて、現存  
の脇侍が当初から戊子  
年銘光背と一具であっ  
たかに疑いがもたれて  
きたのであるが、この  
たびの調査で戊子銘光  
背と現存脇侍が本来一  
具であり当初は旧穴に  
頭後の納が留められて

第1図 戊子銘釈迦如来及脇侍像

第2図 復原位置

あったであろうとの知見を得た。脇侍の背面枿が旧穴に入らないことを確認するとともに新たに頭後の枿が旧穴にびたりと入ることを確認したのである(第3図)。そこで脇侍をその当初の位置に取付けた場合、脇侍像の底部と中尊像の懸裳の先端の高さがほぼ一致し、後頭部と光背との間に脇侍像の頭光一枚が丁度入る程の間隙が残されることも確認した。またその時、脇侍の背面枿は上面が光背下辺に接している。これは現光背は脇侍背枿を受ける枿穴のあった部分を切取っているとみられたのである。いま光背の底辺は中央に幅1.45cm、出1.3cmの枿(現在は後方に折り曲られている)を造り出し、その左右が水平になっているが、おそらく当初は台座天板の幅を除いた両側部が当初の台座下框の上面にまで伸びており、脇侍背枿用の穴はこの部分に穿たれていたと考えられる。

第3図 脇侍と光背側面

ところで台座は近世の後補である。脇侍の天衣の先が切られている点に関し、後補の木造台座のために本来の金銅像を切断するという事は考えられず、これは現台座の新造以前にすでに行なわれていたと見なすことができ、また現台座の損傷を防ぐために銅製の光背に別穴をあけたとも考えにくい。さらに右脇侍台座には脇侍像の乗っていた痕跡が認められない。現在の台座新補時にはすでに外側の枿穴および光背下辺両側の切断が行なわれており、右脇侍と頭光も亡失していたと思われる。なお外側の穴の切断面に金が認められ、その点から鍍金以前の仕事とみなして当初より現在の姿で一具のものであったとする見解が出されている。しかし金が認められるのは切断した際の表面のくいこみ或いは後鍍金ともみることができよう。

以上から現存の光背と脇侍とはもともと一具で、当初は脇侍の位置が現状より低い位置にあり(第2図)、その後(少くとも台座新補以前)、おそらく法隆寺金堂釈迦三尊のプロポーシオンにならって現在の位置に置きかえられたものであろう。なお脇侍の天衣下端の切断は鋳造時の台座との関連によるものと考えられる。ここに想定された当初の形(第2図)の作例が他にあるかという問題などを含め、なお今後の検討を要する。なお本像の調査には奈良国立博物館主任研究官阪田宗彦氏のご協力を得た。

**銘文の調査** 銘文については展示されなかった法隆寺金堂釈迦三尊、同葉師如来坐像を含めて文字の拡大写真を作成した。その写真と調査結果に基づく釈文は別に公刊した『飛鳥・白鳳の在銘金銅仏』(銘文篇)に譲り、ここでは主に鑄刻技法の問題について述べる(口絵)。

鑄刻技法については各銘文に次のような特徴がある。(1)甲寅年光背銘 筆画の起点にメクレが著しい。これは筆画と逆方向にタガネを入れた結果、その終点部分にメクレが生じたためである。鑄刻内に鍍金はない。(2)丙寅年菩薩半跏像銘 メクレは全くなくタガネを用いたあとを研磨し、その後鍍金する。鑄刻内に鍍金がある。(3)戊子年釈迦・脇侍像光背銘 メクレはなく鑄刻内に鍍金がある。ただ本光背は銅板製で、鋳銅製品の場合とやや事情が異なるか

もしれない。銘文の書風は(12)に近い。(4)辛亥年観音像銘 メクレはないがタガネを抜く時の線が残っており、それとは別に文字の刻線の周辺に筆画とほぼ平行するような細線が多く認められる。この細線は二次的なキズとも解されるが、鍍金前につけられていることから、むしろ文字を刻む前にアタリとしてつけたものと考えられる。錨刻内に鍍金がある。(5)戊午年光背銘 本光背は火中による荒れが甚しく技法的な観察は困難である。裏面に金が一、二カ所残るが、全面に鍍金があったかどうかは疑問である。(6)野中寺弥勒半跏像銘 メクレが文字の輪郭の全部に亘って認められる。また、タガネを抜いたあとが細線として筆画の末端に残る。その残存状況からすると、タガネは筆画と大体同じ方向に入れられているようである。錨刻内に鍍金はない。(7)法華説相図銘 メクレはなく鍍金も認められないが、火中したため表面が荒れており、当初からなかったか否かは不明である。(8)鰐淵寺観音像銘 火中したためか(5)(7)などと同様、技法が明確でない。メクレはもともと存在せず、刻銘後研磨されていた可能性が高い。(9)甲午年銅板銘 (6)と同様に、文字の輪郭全体にメクレの残存が顕著である。タガネを抜くときの線はない。また、文字の中に鍍金があって刻銘後の鍍金である。(10)大分長谷寺観音像銘 この像も火中していて技法上の観察は困難であるが、「背」等の文字にはメクレらしいもの残り、その状態からみて(9)と同様の形であった可能性がある。鍍金は文字の周辺に散見するが、刻銘との先後は不明である。(11)阿弥陀三尊像台座銘 メクレは全く認められず、鍍金も刻銘中に入っており、研磨の上鍍金されていることが明らかである。(12)法隆寺釈迦三尊光背銘 顕著なメクレはないが、文字の角などにごくわずかのメクレが認められる。鍍金について十分な確認はできなかったが、現状では刻銘中にはないようにみえる。(13)法隆寺薬師如来坐像 筆画の始めや終わり、角の部分に顕著なメクレがある。これも(1)と同様タガネを入れた終点や角の部分にメクレを生じたものであろう。鍍金は明らかでないが、刻銘中に入っていないとみられる。

各銘文の技法的特色は以上の通りである。現在伝統的技法によっている鋳金家のタガネ技法では、文字を錨刻する場合削りタガネと打ちタガネの二種類が使用される。削りタガネの場合は地金を削るように寝かせて打つのでタガネ打の速度が落ちる場所にメクレができやすい。一方打ちタガネではタガネを立てて地金を押開くように打つので文字の輪郭全体にメクレが生じることが多い。また、削りタガネの場合、一本の線は一気に刻み、線の肥瘦はタガネの角度(上下、左右方向)で調節する。以上のような技法がそのまま古代の作例にあてはまるかどうかは検討を要するが、遺品を調査した結果からは古代の技法とさほど差はないように思われるので、一応これを上記の作例にあてはめ分類してみると、(1)~(4)、(7)(8)(11)~(13)などは削りタガネ、(9)は打ちタガネによる刻銘と考えられる。(6)は削りタガネの上に打ちタガネの技法を併用している可能性が高い。なお、(3)(12)(13)を比較すると、(3)(12)は錨刻技法や書風の上で親近性が強いのに対し、(13)は全く異質である。これは製作年代の考察上注意されてよからう。

(星山 晋也・東野 治之)